

JICA シニアボランティア 千葉

SVニュース千葉 第31号

2019年10月1日発行
千葉県JICAシニアボランティアの会
chibajicasv02@gmail.com



本号目次

通常総会・人事 公開講演会	1-2
活動報告会	3-4
出前講座	4-6
派遣国事情	7
会員の動静 国際フェスCHIBA 浦安多文化フェア 県庁表敬訪問	8

公開講演会・2019年度総会を開催

2019年5月11日(土)午後1時半より浦安市の国際センターで、来賓諸氏をお迎えして公開講演会と通常総会を開催しました。

来賓としてJICA東京市民参加協力第一課 柿沼氏、JICA千葉デスク 安達氏、浦安市国際センター長 渡辺氏の3名にご来場いただきました。

公開講演会は、シリア出身の志覇武 J. モハメド氏から、北アフリカから始まったアラブの春といわれた革命が、シリアに及ぼした影響と内乱の現状について、具体的に戦火を受けている状況及び歴史的な背景説明をしていただきました。特に興味深いテーマであったため、一般の方が27名も参加されました。

引き続き2019年度通常総会が行われました。出席者34名、総会は、委任状提出者33名で、会員の過半数を超え、開催要件が成立しました。

総会では、1号から6号までの議案が、原案の通り全て承認されました。本年は、議論となる論点もなく、整齊と終了することができました。

会長 挨拶

渡邊 要吉



皆様こんにちは。ご多用の中、多数ご来場いただきまして大変有難うございます。

今日の講演会は私たちには遠い国シリアのお話でございます。

講演者の志覇武モハメドさんは、シリアから日本の大学に留学して勉強された方で、日本語も堪能な異色の人であります。以前うらやす市民大学の講座でお会いして、積極的な意見をお持ちの方だと記憶しております。また、JICAの講演会でも講演されており、その点では有名な方です。

日本についても詳しく、日本シリア友好協会の会長でもありま

す。講師は質疑応答に大変興味をお持ちですので、活発で十分な意見交換を期待しております。どうか時間の許す限りお楽しみいただければと思います。

今日は十分に議論をしていただくとともに、総会の後に懇親会もございしますので、また楽しく親睦を深めてお帰りいただければ幸いです。



- ・2019年2月から9月までに、以下の方々より当会に合計46,398円の御寄付がありました。大変ありがとうございました。濱崎丘、岡崎英子、渡邊要吉、村田淑子、三輪達雄、添野良一、高瀬義彦、浦木仁、建川大輔、増田光司（敬称略）
- ・各種イベントで景品として使用する外国からのお土産、及び活動報告会などで展示する写真を募集しています。chibajicasv02@gmail.comまで、特に最近ご帰国の方は、是非お寄せください。
- ・退会の際は、名簿の誤りを防ぐため、退会届（自由書式）を事務局に電子メールか郵便でお送りください。

2019年度 新役員人事

・会 長 渡邊 要吉 (船橋市)	・幹事 岡崎 英子 (千葉市)	・幹事 中西 陽典 (我孫子市)
・副会長 三輪 達雄 (我孫子市)	・幹事 佐藤 聡 (東京都)	・幹事 増田 光司 (市川市)
・事務局長 伊藤 義博 (千葉市)	・幹事 添野 良一 (鎌ヶ谷市)	・特任委員 登内 明 (浦安市)
・会計監査 村田 淑子 (東京都)	・幹事 高瀬 義彦 (柏市)	(うらやす市民大学と連絡)

第25回 公開講演会

シハブ（志覇武） J. モハメド氏

「私が体験したシリアの春／戦乱の母国を逃れて」

当会主催の公開講演会は、今回で25回目となりました。行楽日和の土曜日でしたが、来賓3人を含め64名の参加者で研修室は満席でした。一般



の方々27名と、かつてないほどの人が参加してくださいました。シハブ（志覇武） J. モハメド氏の講演では、以下のように、日本では一般には知ることのできない、深刻な実情を話して下さいました。

歴史的大シリアの時代から、現在のシリア – シリアの春は内戦ではない！

シリアの歴史は長く、一万二千年に及びます。イスラーム勃興時代からシャーム地方と呼ばれた地域は、現在のシリア、レバノン、ヨルダン、パレスチナ、イスラエルを含む地域にほぼ該当します。歴史的な呼称として大シリアともいわれるこの地域には7つの民族が平和に暮らしていたのです。

地域内に対立が始まったのは、400年前にオスマントルコ帝国が滅びて、西欧の国に支配されるようになってからです。彼らは、国旗、ビザというようなものを作り、地域を分割させたのです。

戦火と実態 – ビデオからの叫び

短いビデオの紹介があり、この中で病院が空爆を受けたシーン、化学兵器の犠牲となった多くの人々等々がありました。

現在シリアには、国内避難民が630万人、国外避難民が500万人、国内に支援を必要とする人が1,350万人います。

紛争の原因 – 大国の黒い思惑と自国のまとまりの弱さ

アラブの春から始まったシリアの春は、最初は武器のないクリーンな革命でした。それを激化させたのは、どうしても紛争を起こし、この地域を分割しておきたい勢力（西欧大国、ロシア）でした。彼らが、ギャングを雇い武器を持ち込みました。ISの主体は、シリア人以外の外国人です。

ですから、内戦ではありません。歴史的にこの地域は、多民族が平和に暮らして来たのです。今なぜ、国内で内戦をする必要があるのでしょうか。

このような悲惨な紛争をやめようとするのは、その方が利益を得られる勢力がいるからです。

一方シリア側の問題としては、国家として国民がまとまっていないことがあります。

アラブの春の混乱後に行われた選挙結果を、国民が一致して支持しないで、また二つの勢力に分かれてしまいました。

これは、もともと汚職があつて為政者を信用できないからです。例えば、サウジアラビアの王様が何を言っているのかわかりません。アラビア語ではなく、内容がわからないというレベルなのです。私は、1998年にパルミラの遺跡を日本が修復するというミッションに携わったことが、最後の所で否決されました。上層部の者が欧米からの賄賂を受け、反対したからと聞いています。

国際社会への期待 – 国連への期待、日本への期待

国際社会では、銃で何人かが殺されたと言え、大変なニュースになるのに、なぜ、シリアの子供たちが何百人も化学兵器の犠牲になっても、助けようとしませんか。国連には、どちらが化学兵器を使ったかという詮索よりも、使用を止めるよう働きかけてほしい。



シリアは、今まさに空爆を受けているのです。国連等が重要なパルミラ遺跡を守ると言って助けてくれますが、そんな事より、子供たちの命を守る働きかけをしてほしい。建物は、後からでも修復ができますが、人の命は戻りませんから。

紛争が11年間も続いています。その間子供たちは、学校に行けなくて大人になります。このままでは、皆が犯罪に走ってしまいます。それは防ぎようがありません。

日本には、他の国々と協力して、何とか助けて欲しいと願っています。

以上のように、講演会は、聴衆に、苦しみに喘ぐシリアの人々を直接援助したいと思わせる内容となりました。

この結果、講演会と同時に行なわれていた募金活動には、早速23,177円の募金が寄せられました。（添野）

第27回活動報告会



9月7日(土)、千葉市国際交流協会プラザ会議室で、JICA東京の長谷川次長より基調講演をいただいた後、帰国したばかりの3名のボランティアによる報告会を行いました。来賓には、JICA千葉デスク安達氏、JOCV千葉OB会平澤氏にご来場いただきました。

報告会には、暑い中にもかかわらず39名もの参加者がありました。伊藤事務局長が進行を担当し、それぞれの報告者からは活動内容、現地での体験、感想などが話されました。

基調講演「世界情勢の変化とJICAの今後の施策」 JICA東京 次長 長谷川幸弘氏

世界の秩序に大きな影響を及ぼす動きが各地で見られ、紛争や過激主義、貧困や格差、難民の急増と長期化、感染症や自然災害など、相互に関連する課題が、国境を越えて地球上の多くの人々の命と尊厳を脅かし続けています。

この間、日本のひとり当たりのGDPは25番目と低下しています。しかし、世界とのつながりの中で生きる日本にとって、世界が平和で安定し、繁栄することは日本の存立にとって重要であるとの国民の認識は一致しています。

JICAでは、このような状況の変化にともない、若い職員が中心となり、ビジョン、ミッションを2017年7月に改訂致しました。

ビジョンを「信頼で世界をつなぐ」としました。即ち、JICAは、人々や国同士が信頼で結ばれる世界を作り上げていくことを目指して行くという事です。

具体的に施策を進める方法として、2015年の国連サミットにおいて合意した「持続可能な開発目標（SDGs）」の実現に向けた取り組みを行っています。

その中で、現在最も重視しているのが、「JICA開発大学院連携」です。ここでは、開発途上国の発展を支えるリーダーとなる人材を日本に招き、国内の大学と連携しつつ、日本の近代の開発経験と、戦後のドナーとしての知見の両面を学ぶ機会を提供して行きます。

また、JICAでは、「人間の安全保障」の観点から、国によらない難民支援を直接行うこととしました。

現在の喫緊の課題は、千人を割り込んだJICA海外協力隊応募者数をどのように回復させるかということです。現在JICAでは、この対策を検討中です。（添野）



「日本の生産管理方式が芽吹いている！」

浦木 仁



コロンビア第2の都市メデジンにて、全国に各種訓練センターが100ヶ所以上もある国立職業訓練庁の縫製技術の教育現場で、生産管理のコンサルタントとして活動しました。拠点作りの為、赴任現場の改善指導から始め、他の現場や企業工場へ伸展しました。

私は日本の生産現場を経験後、メキシコ、チリと同職種のボランティア活動を行い、その集大成としてコロンビアにきました。目標は「改善を自主的に継続できる組織を作る事」です。

彼らの真面目で几帳面な性格故か、想像を超えるスピードで

進み、職場の朝のラジオ体操は、私が手本のスペイン語版ビデオを見ながら実施継続され、約1年半で延べ22,000人以上が参加、自主的に夕刻にも行うようになりました。安全確認の指差呼称も導入しました。

国立職業訓練庁での教育が終わり、アドバイザーに徹しつつ、企業の訪問改善に重心を移しました。各企業は非常に意欲的ですが、他の国と同様に集団で考えるという企業文化が無いので、中南米バージョンでの組織作りを進めました。最終指導も終わり、各組織における日本式生産管理法の芽吹きを感じています。これからは楽しみです。

日本ではコロンビアは危険な国という印象が強いですが、気候が良く人情にあついメデジンは、リタイア後に住もうという人も多いようです。今後は、コロンビアのコラソン（心根）を持ち帰り、これらの経験を伝承したいと思っています。

「モロッコでの日本語教育活動など」 増田 光司

私は、モロッコ、マラケシュ市のカディアヤド大学で、大学院応用英語学科の必修日本語科目(モロッコ諸大学中、唯一の正規授業)と大学内学生対象の日本語公開講座を担当しました。後者は、学生の日本文化クラブ(以下、JCC)と協力し、日本語授業の他、スピーチコンテスト、日本語能力試験の受験受付も行いました。

モロッコでは、学生・若者が、日本のアニメを出発点に、日本語や日本の諸々へ興味を持ち、クラブを設立しています。かつてはモロッコからイスラム勢力がイベリア半島に進出したものの、現

在は西欧諸国に政治・経済的に圧倒されている—そんな歴史の翳りのない、遠い極東の日本に、言わば夢の国の憧れを抱くのかと感じられました。

マラケシュ近郊市での元JCCメンバーによる日本語入門講座の誕生(日本語教育の現地化・技術移転)、JCCによるマラケシュの日本人へのダリジャ(アラビア語モロッコ方言)教室の開催(双方向のボランティア活動)、これらは活動の楽しい成果と言えます。



「マレーシアでのボランティア活動」 建川 大輔

私は、東マレーシア、ボルネオ島のサラワク州の都市ミリにある職業訓練校の電気通信学科で、教員達に最新の電気通信技術(特に携帯電話インフラシステム技術)を教えるために、2016年10月から2年間、活動しました。

メインの活動として、電気通信学科の講師を対象にして、最新の電気通信技術に関する技術の伝授セミナーを月に数回催すことにしました。しかし、講師達や学校の都合で講師が一堂に集まる機会が少なく、予定よりも開催回数が極端に少なくなっていました。そのため、活動2年目以後はトークセッションと銘打ってディプロマコース学生も対象に加えて開催を続けました。携帯電話技術の進化、携帯電話インフラシステム、衛星通信技術の応用などのトピックスで、毎回熱心な質疑応答

がありました。

その他、光ファイバー融着装置の技術研修教育を日本で行うよう、技術研修計画を学校側に提案しました。電気通信学科では光ファイバー融着装置の実習教育を行っていますが、日本製の装置の損傷が激しく、講師達は装置メンテナンスが不特手であり、日本での技術研修を希望していました。

そこで、私の一時帰国と学長の国際学会参加のための来日スケジュールが運よく重なったこともあり、東京都内のメーカー2社に学長を案内し、トレーニング施設見学を行い、学校側から中央省庁に技術研修実施の提案を行いました。



出前講座レポート (2019年2月～7月)

「素敵なパラオの人々」

2月7日(木) 講師 中村 時夫

柏市豊小学校の6年生101名を対象に中村氏がお話しました。子供たちは、予めパラオについての課題が与えられ、調べていました。

パラオは赤道の北に位置し、人口も2万人程度、豊かで澄んだ海に囲まれ、50kgもあるカジキマグロを吊り上げる体験ができる。人々は、オープンな性格で、ゆったりと時間が流れる良い環境の中で笑いが絶えない。戦前、日本により28年間統治されていたこともあり、日本語や一部の食習慣や、神社などが残り、さらに現代では、日本からの援助による友好の橋や道路の整備などもあって、親日感情の強い国である。

配属された教育省では、主に算数教育について、小学校1年生から中学2年生までの学力向上と、先生方の能力水準を引き上げるために活動を行った。具体的には九九の間違いが多かったため、全校生徒一斉テストを実施し、一方先生方には、

講習会で力をつけてもらった。その指導の結果、短期間で正答率が格段と高くなった。

その他、学校内の行事なども紹介。地域の人たちがドンドン加勢していく運動会の綱引き、走ら

ないバスケットボールの競技など面白く紹介されたので、子供たちが笑ったり、手をたたいたりしていた。講師は小学生向けの話し方に慣れていて、所々、質問を入れて考えさせ、手をあげさせていたので、児童たちは、最後まで興味深く聞き入っていた。最後にパラオの子供たちは、貧乏でも校内ではいじめなどはなく、明るく、仲良く一勉強していること、将来意思があれば、誰でもJICAの活動で世界中へ行けることを紹介した。

子供たちから食べ物？スポーツ？など関心のあることについての質問があり、45分はあっという間に終わりました。(弓)



「ブータン王国から見た幸せとは」

2月15日(金) 講師 三輪 達雄

市原市立有秋公民館で30名の聴衆に対して三輪氏が出前講座を行いました。

ブータンは人口70万、面積は九州とほぼ同じ。中国とインドに挟まれた国境の国、標高100メートルの低地から7,500メートルの高地まで。公用語はゾンカ語で、学校教育が英語で行われるため、英語の通用度も高い。ブータンの人々は敬虔なチベット仏教の信者で、幸福度では世界一である。収入源の30%は国際援助であり、インドと日本が主たる支援国である。日本とは平和条約が締結されていないので、JICA事務所がその役割を担っている。人々は親日的である。

協同組合の設立の指導が主目的であったが、設立は簡単な

ものではなく、まずは連合会設立のアドバイスや実態調査を中心に行った。ブータンは、中国とインドに挟まれていることが、政治情勢を複雑にし、インド、日本などの援助からの独立が課題である。ブータンでも若者は変化しており、失業や薬物など問題も多い。自然との共生の維持も問題を含む。

しかし、2年間の滞在で得たことは多く、日本の現代の問題の解決にも参考になるものが多かった。
(増田)



「アフリカ？大洋州？発展途上国？感染症（マラリア）？」

3月1日(金) 講師 渡辺 章

柏市立高田小学校で、6年生93名を対象に渡辺氏が話をしました。

自己紹介の後、マラリアの話では、種類やどんな病気か、雌蚊が感染を起こすこと、その防止策として水溜まりを排除する大切さを説明し、感染数や死亡数なども示した。日本でも海外渡航者が感染し、死亡率も高いという話に、他人ごとではないマラリアのことが子供たちに浸透した。次のアフリカの話では、子供たちにアフリカの国連加盟国数等について予め調べる課題を提示してあり、アフリカの植民地時代から話を分かり易く進めて、食べ物等の物価、病院の中の様子や、文化、自然公園にいる動物等の話があった。大洋州では風疹、はしかなども含めてワクチンプロジェクトを組んで、島々をめぐる活動を紹介。赤道直下の島の様子や年に2回しか舟が行かない島、人口が7人だけの島など、大きな環境の違いの世界があることについて考

えるヒントが与えられた。最後にJICAの広報ビデオ「何時か世界を変える力になる」が上映された。これは、ブータン、シリア、セネガルなどで実際活動しているJOCVやSVの人達を追ったドキュメンタリであり、活動の内容や現地の様子など、ボランティア活動について子供たちにも非常に分かり易く、興味深そうに見入っていた。

生徒からJICAの活動をして良かったこと？活動に入るきっかけは？などの質問があった。いつもと違う授業で面白かった、自分も将来JICAの活動をしてみたいなど、子供らしい素直な意見が聞かれ、先生方から目がキラキラしていたと感想をいただいた。
(弓)



うらやす市民大学本講座－第二回

「ブータン王国から見た幸せとは」

7月10日(水) 講師 三輪 達夫

今年度より「うらやす市民大学」で『開発途上国から学ぶ』というタイトルで9回の講座が計画されています。

7月10日に三輪氏による「ブータン王国から見た幸せとは」と題して、第二回講座が開催されました。

第一回は講座紹介のガイダンスで登内（筆者）より既に行われています。

現地の文化、宗教、地理、生活などが、分かり易く紹介されました。自然を保護し自然と共存していくブータン国民の考え方の紹介から、『幸福論』について三輪氏独自の理論展開が紹介されました。

今回の本講座受講生はほとんど全員が海外滞在経験者という異文化経験の豊富な方々です。皆、熱心に耳を傾けていました。講座終了後の受講生からのアンケートでは理解度、満足度、興味度すべてが高評価でした。次回以降の講義が期待されています。（登内）



「ブータン王国から見た幸せとは」

7月12日(金) 講師 三輪 達夫

市原市・五井公民館において84名の受講者に、三輪会氏が話をしました。

三輪講師は自己紹介の後、ブータン国民が敬虔なチベット仏教徒であることから話を始め、人々が殺生を忌み、蠅や蚊も、蚤やダニさえも殺さないことにふれ、満場から驚きの声が上がりました。そして、道に、野良犬・野良猫は言うに及ばず、野良馬・野良ロバ・野良牛、…が闊歩している写真が提示されました。以下、写真も豊富に使われた講義の内容です。

ブータンは九州とほぼ同じ面積に70万人が住む小国ながら、標高は7500m(ツンドラ地帯)から100m(亜熱帯のジャングル)の低地までと変化に富みますが、自給自足的な農業、豊富な水力を利用した発電、観光の他、製造業などの第2次産業がないという驚きの特色があります。このように日本人の常識の意表を突く人々の生活ぶりが、数々あります。

ブータンは9割以上の国民が自分が幸せであると認めたこと、

王が自ら反対する国民を説得し、王政から立憲君主制に変えた(2008年)ことで、世界の耳目を集めました。この名君が道路も碌にない山奥の村々全てに電化を約束したとき、送電線が出来たら、渡ってくる鶴が傷つき死ぬからと、電化を断った村もあります。

ブータンの人々は民族衣装が日本の着物に似ていれば、顔つきも日本人にそっくりです。時間は守らないし、借りたお金は返さないけれど、困っている人は助けずにはいられない、限らない人のよさもあります。殺生を忌み、自然とともに生きようとする彼らの姿には、かつてそうであった日本人が共感できるところがあります。

日本人が近代化の過程で忘れ去ってきたものをブータンの人々が教えてくれる、また、そんなブータンにもネットを初めとする近代化の波が押し寄せ始めたとして、三輪氏は講義を終えました。(増田)



「国際協力の現場 異文化に暮らして日本が分かる」

7月17日(水) 講師 添野 良一

鎌ヶ谷市東初富公民館の公開講座「JICAシニアボランティア活動報告」で、68名の視聴者を対象に、添野会員が「国際協力の現場 異文化に暮らして日本が分かる」のテーマで出前講座を行いました。

最初に、JICAボランティアの活動の前にマレーシアのコタキナバル総領事館での生活、そこでの剣道指導とのめぐりあい、ここがJICAシニアボランティアの活動のきっかけになったことの紹介がありました。コタキナバルの紹介、街中の動植物の説明もあり、年配者の方々にもわかりやすく、興味の湧くような話題が多かった。

ウルグアイの活動については、国情、生活文化、慣習など多

岐にわたり、北部サルト市で日本企業が建設したダム の状況、剣道の指導をした仲間たちの紹介もあり、日本ではなじみのないウルグアイの話は珍しいことばかりで、大変興味深そうに聞いている人が多かった。(伊藤)



うらやす市民大学本講座 – 第三回

「シリアはまるで人類史博物館」

7月24日(水) 講師 高瀬 義彦

シリーズ講座『開発途上国から学ぶ』第三回として高瀬氏による講座が開催されました。

以下講義内容を示します。

1. 派遣前研修

『人間の安全保障』『文化相対主義』について学んだ印象を説明されました。

2. 任国における活動内容

任国赴任時の語学研修(アラビア語)、配属先での活動内容、および人的交流などについて、新しい発見から自身が気づいたことを示しました。



3. シリア国の文化・歴史について

受講生が最も関心のある分野であるため、講義の中心となる内容でした。文明の十字路をキーワードとして、古代文明からローマ帝国の支配、キリスト教文化、イスラム勢力の勃興、さらに十字軍の侵攻から現在に至る文化の源流を説明されました。

4. 気づきの提示

異文化に接することにより世界理解が広がり、そこから文化相対主義への気づきが提示されました。

テーマがシリア国ということから、受講生の関心は極めて高く、講座出席率は100%でした。また今回の講義は、講義内容、質疑応答すべて高度なレベルでまとめられていました。また今回も、講座終了後の受講生からのアンケートでは、理解度、満足度、興味度すべて高評価でした。(登内)

派遣国事情 現在派遣中の会員、最近帰国した会員のホットな現地情報です。



チリ

サンティアゴでの共生について

職種 剣道 高田 将之

私は剣道の普及と技術向上の為に南米チリの首都サンティアゴに派遣され、活動を行っています。この場所で感じたことについてお伝えしたいと思います。

それは犬です。チリ人はペット好きです。特に犬好きです。



私が訪問したチリ人の家には、必ずペットの犬がいました。家が大きければ4~5匹、1部屋のアパー

トに住んでいる人も1匹は飼っていました。全員が飼い犬に癒やされて満足しています。この様に、飼われている犬が多いのですが、残念ながら飼い主の様々な都合で野犬になる犬もいます。日本と違って保健所が野犬狩りをしないようなので、街中で野犬をよく見かけが、ここの住人達が餌を与えているので、人間に馴れています。

昼過ぎに乗客が少ないバスに乗った時の事でしたが、下車口から大型の野犬が乗ってきました。バスの運転手は何事もなかったかのようにドアを締めて出発しました。野犬はバスの中で大人しく座っていました。バス停を3つ過ぎた頃に野犬がバスの中を歩き回り始めました。4つめのバス停で、バスを降りるお客と一緒に野犬はバスを降りました。まるで行き先を決めていたかのように。乗客たちはそれを見て微笑んでいました。後でチリ人に聞いたら、よくある事だそうです。

狂犬病の心配はありますが、大人しくて賢い野犬は多くの人間に癒やしを与えてくれています。ここの住人達は野犬に生命権を与えています。この補完関係を見ると、サンティアゴの野犬は人間と巧く共生できている、と私は感じました。



アルゼンチン

ポサーダス雑感

職種 日本語教育 畑野 郁子

アルゼンチンの北、パラグアイとブラジルに挟まれたミシオネス州、ポサーダス日本語学校で日本語教師をしています。アルゼンチンには約20の日系日本語学校があります。ミシオネス州にもほかに3つの日本語学校がありますが、日系人のコミュニティがあるところに学校があります。

ポサーダス日本語学校は生徒数約60人、児童はほとんど日系人ですが、大人はほとんどが非日系人で、人数は半々です。日本語の人気はともありますが、生徒たちにとって、普段使う機会のない日本語を継続して勉強していくのは、大変そうです。

アルゼンチンの特色としては、シエスタがある（ブエノスアイレスなどの都市部はもうほとんどなくなりました）ことと、特にミシオネス州はマテ茶栽培で生計を立てている人も多いため、飲むサラダと言われるマテ茶を抱えて常に飲んでいることです。グアンポと呼ばれる容器に茶葉を入れ、ボンビージャと言う金属のストローで、みんなで回し飲みをします。北陸では『弁当忘れても傘忘れるな』と言うそうですが、こちらは『マテ忘れるな』でしょうか。ポツ

トも含めひと荷物です。バスの運転手さんや学校の先生たちも、授業よりマテ茶を飲んでる時間が、多いのではと思うくらいマテ茶が好きです。

私はここで日本語能力試験対策のクラスと習字や折り紙などの日本文化を教えています。

日系人の子どもたちは3世ですが、日本語を使う機会がなくなっているため話すことが難しくなっています。親御さんたちは少しでも日本語や日本の文化、習慣、しつけなどを学んでほしいと思っています。生徒たちは日本が大好きでいつかは日本に行きたいと思っている子たちがほとんどだと思います。

でも日本もだんだん変化してきて、果たしてみんなに誇れる環境にあるのかと心配になります。

いろいろなイベントもありますが、夏祭り（11月です）では、巻きずし、餃子、焼きそば、焼き鳥などの日本食をみんなで作り資金稼ぎをします。子どもたちは太鼓をたたきます。また、みんなで盆踊りも踊ります。最近日本でも盆踊りなどを踊る機会がなかったのに、ここに来てから踊るようになりました。私が子供だった頃の数十年



自主イベント開催

イオンスタイル検見川浜で自主イベントを開催しました。6月9日(日)13時半から、JICAシニア海外協力隊リアル体験談「世界の果てに住んでみた」第2回を行いました。

今回は、村田淑子、三輪達雄の両氏が、講演を行いました。7日に梅雨入りし、あいにくの空模様でしたが、延べ40人以上の

来場者が熱心に講演をお聴きくださいました。どうもありがとうございました。



国際フェスタCHIBA

5月19日(日)千葉市美浜区の神田外語大学で実施された「国際フェスタCHIBA 2019」に展示ブースを設置し、当会から6名が参加しました。海外でのシニアボランティアの活動状況を

パネル展示したり、国際クイズを実施しました。

多くの来訪者があり大盛況でした。



浦安市多文化共生フェア

今年、例年より早く5月19日に浦安市多文化共生フェアが行われました。本年度から、植木まつり、水神祭、環境フェアとジョイントし「浦安春まつり」と名称を変え行われました。

当会は、浦安公園で行われた多文化共生フェアにブースを出店しました。参加した団体は、浦安市外国人会等々の9団体でした。

5月の爽やかな天候にも恵まれ、たくさんの来場者がありました。来場者の皆さんには、国際クイズ、外国語挨拶体験を楽しんで頂きました。国際クイズには、104名のお子さん達やご父兄に参加していただきました。対応には、役員5名、応援に元役員1名、及

び県立浦安南高校のネパール人高校生1名が当たりました。

会員の皆様からご寄付頂いた海外からのお土産を景品として、

今回からクイズ3問の正解者にさしあげました。それでも、たくさんの方々に参加していただいたので、景品がほとんどなくなってしまいました。



JICA海外協力隊千葉県庁表敬訪問

県庁表敬訪問が8月8日(月)に行われました。帰国隊員6名(内シニア1名)、派遣隊員15名でした。JICA東京の市民参加協力第一課高田課長が挨拶され、帰国の労をねぎらい、これから出発の隊員に対し、現地の人々との交流を大切にし、現地の人々の期待に答えて欲しい。令和の時代となり、国内外の事情が一変したが、又元気な姿で2年後にお会いしたいと、挨拶されました。

県庁総合企画部、千葉の魅力担当部長は、任務を果たして帰国した隊員の労をねぎらい、出発の15名の隊員の高い志を讃える一方、「千葉の魅力の世界に伝える伝道師になって欲しい」と、挨拶されました。



会員の動静

会員数 103名 (令和元年9月末現在)

平成31年2月1日から令和1年9月末日までの間に帰国された方は次のとおりです。(敬称略)

- ・浦木 仁 (市原市) コロンビア 品質管理
- ・宮野 伸也 (千葉市) スリランカ 養蜂

令和元年9月末日現在の派遣中の方は次のとおりです。

- ・麻生 伸彦 (茂原市) パヌアツ コンピュータ技術
- ・石原 建男 (富里市) ドミニカ共和国 理学療法士

- ・岩井 潮里 (千葉市) ソモン 栄養士
- ・大西 和夫 (千葉市) コロンビア QC・生産性向上
- ・小澤 彰 数学教育 ニカラガ 八千代市
- ・神林 恒男 (柏市) コロンビア QC・生産性向上
- ・島中 一俊 (千葉市) ミャンマー、コンピュータ技術
- ・高崎 忠信 (佐倉市) カンボジア コンピュータ技術
- ・高田 将之 (船橋市) チリ 剣道
- ・多田 ノブオ (千葉市) ベトナム 再生エネルギー
- ・田畑 成章 (柏市) インドネシア 経営管理
- ・畑野 郁子 (習志野市) アルゼンチン 日本語教育
- ・服部 正 (八街市) コスタリカ 体操競技
- ・半田 滋 (市原市) 鉱業 コロンビア